

(基調講演まとめ)

登壇者:福田淳一氏(北海道新聞元編集委員)

「社会現象」となった終活

最近、「お終活 再春！ 人生ラブソディ」という映画が全国上映されました。入場者にはメッセージノート(エンディングノート)を配布しています。そんな時代になりました。

「終活」はマスコミの造語で、シニア層から将来を不安視するZ世代にまで対象が広がり、お葬式、お墓から生前整理、遺産相続、介護、成年後見、尊厳死、死後事務など多様なジャンルが出現しています。自治体や社会福祉協議会、金融機関などもかわり、今や「社会現象」と言えます。日本は世界に類を見ない超高齢社会から、亡くなる人がかつてないほど多い「多死社会」を迎えています。そんな中で終活の意味を考えてみます。

安心と情報の氾濫

終活を経験した人がしばしば口にするのは「安心した」「安心して死ねる」という言葉です。終活の効用は、例えば死後事務(葬儀、納骨、遺品整理)を委任しておくことで、不安を解消、軽減し、安心してその後の人生を送れることが大きいと思います。死に支度という側面だけでなく「心の健康寿命」を伸ばすことに知識を活用してはいかがでしょうか。

一方、終活には弊害もあります。終活情報が氾濫し、「終活はしなければならない」と思い込むことはありませんか。これはストレスになりかねません。自分によって必要と思われる分野の知識を習得すればいいので、すべてが「必修科目」ではなく、「選択科目」ととらえればよいでしょう。さらに、情報が独り歩きして、①生前整理が流行しているので、捨てたくない物まで捨ててしまう②家族葬なので、会葬は一緒に住んでいる家族だけ③親族など周囲に相談しないで墓じまいーといった行動で周囲とトラブルを起こすこともあり、注意が必要です。

ですから、ネットなどであふれる終活の情報をどう選ぶか。上手に判断する「情報リテラシー」が必要になりそうです。そして、あふれる情報の一方で、終活を嫌う人もいます。個人の価値観は自由です。しかし、範囲の広がる一方の終活に目を背けると、自分が必要とする知識まで見落とすことになりかねません。やはりタブー視しない方がいいでしょう。

お葬式、お墓の多様化

さて、ここで、最近のお葬式、お墓の事情を少々お話します。全国的には、コロナ禍の前から家族葬が普及し、会葬者が減少する傾向にあり、コロナ禍がそれを加速しました。ただ、直近の調査では家族葬がやや減り、一般葬がやや回復する傾向を見せています。札幌市が2023年に火葬場利用者に調査したところ、家族葬が59・8%、一般葬が23・2%、直葬が10・3%、一日葬が6・7%という結果でした。従来から一般葬に対し、家族葬という言い方をしてきました。しかし、23・2%では、「一般」と言えるかどうか。むしろほぼ6割の家族葬を「一般葬」と称した方が自然な時代です。

お墓も、個人の墓、夫婦の墓、両家の墓、合葬墓、樹木葬と多様な選択肢が現れるようになりました。中でも、樹木を墓標代わりにする樹木葬は人気を集めています。最近では、期限付きの墓やペットと眠る墓も出現しています。もう一つ、目立つのは墓じまいの増加です。厚生労働省によると、北海道の墓じまい(改葬)の数は、2012年度に4383件で、都道府県別で4位だったのが、2022年度になると1万2243件と3倍近くに増え、都道府県別でトップになりました。道内で市町村の合葬墓は、2012年～13年ごろから増え始めました。北海道新聞の調べで2023年10月は72カ所に達しておりますので、これが遺骨の受け入れ先となって墓じまいが増えた背景になっているようです。

「身寄りなき老後」支える成熟社会を

一方、最近の報道では、孤立死、無縁の遺骨、引き取り手のない遺体、無縁の遺骨や墓といった身寄りのない高齢者の話題が目立ちます。この傾向はどうなるのでしょうか。講演のタイトルにもあるZ世代が40代、50代になる今世紀半ばの社会を想像してみます。世帯数の将来推計によると、2040年～2050年に一人暮らしの高齢者が全国で1000万人余になり2010年の2倍強に達します。しかも未婚の傾向から近親者がまったくない一人暮らしの高齢者が急増する可能性があります。当然、孤立や貧困、無縁の遺体や遺骨、お墓の問題が深刻化しそうです。

フランスの哲学者、シモーヌ・ド・ボーヴォワールはその著「老い」の中で、「ある社会は、老人をどう扱うかによって、(中略)真実の姿を赤裸々に露呈するのだ」と述べています。つまり、社会は高齢者の扱い方で真価が測られるということでしょう。

身寄りなき老後を支えるため、葬儀社と協力し死後の葬儀、納骨などを行政が支援する横須賀市の例は有名です。家族がかつてのように機能しにくくなった以上、高齢者が一人でも困らず、安心して旅立てる成熟社会の仕組みが求められていると思うのです。それがZ世代に残すべき社会ではないでしょうか。ご清聴、ありがとうございました。